口述6-4 早期退院した脳卒中患者における身体的特性

○増田 裕里（ますだ ゆうり）[1)]，吉田 啓志[1)]，近藤 駿[1)]，藤原 慎二[1)]，嶋尾 悟[1)]，
阿波 邦彦[2)]，浜岡 克伺[2)]
1）千里中央病院 リハビリテーション科，2）大和大学 保健医療学部 理学療法学科専攻

Key word：脳卒中患者，早期退院，回リハ

【目的】回復期リハ病棟の入院患者に対しては、診療報酬改定により早期退院が求められ、効率的で且つ質の高い理学療法が要求されている。入院患者に対して早期退院を促進させるためには、患者の身体機能・能力に加えて、疾病の影響による予後予測を考慮し、治療計画を実施する必要性があると考えられる。しかし、脳卒中患者は、運動麻痺や感覚障害など身体的な障害に加えて、疾病に特化した高次脳機能障害などを併発していることが多く、明確な治療方針が定まらないまま、長期入院を余儀なくされるケースも少なくない。臨床現場において早期退院に向けた取り組みを実施するためには、早期退院した患者の身体機能・能力を明らかにする必要性があると示唆される。

本研究の目的は、早期退院した脳卒中患者の身体機能・能力を明らかにすることである。

【方法】研究対象は、在宅復帰した脳卒中患者10名とした。内訳は、男性：6名、女性：4名（平均年齢73.2 ± 8.7歳）であった。当院の在院日数が90日未満を早期退院群、90日以上を通常退院群の2群に分類し比較した。

研究方法は、後ろ向き研究を行った。説明変数として抽出した項目は、入院時および退院時における麻痺側・非麻痺側膝関節伸展筋力、Timed Up and Go test（TUG）、10m歩行速度、6分間歩行距離（6MWD）、Berg Balance Scale（BBS）、Functional Independence Measure（FIM）の計7項目を抽出した。

統計解析は、早期退院群と通常退院群の2群間における各身体機能・能力と各時期の差について、対応のある2元配置分散分析と多重比較検定（Bonferroni法）で比較した。なお、統計解析は、Excel統計を用いて有意水準は5%未満で判定した。

【説明と同意】本研究は、千里中央病院研究倫理審査委員会の承認および研究対象者である患者に対して十分な説明と同意を得て実施した。

【結果】多重比較検定の結果、早期退院群で有意な差が認められた項目としては、6MWD、10m歩行速度、FIM合計点数、FIM運動項目、FIM認知項目であった。また、通常退院群で有意な差が認められた項目としては、BBS、10m歩行速度、TUG、麻痺側・非麻痺側膝関節伸展筋力、FIM合計点数、FIM運動項目であった。

【考察】本研究は、脳卒中患者を対象に早期退院群と通常退院群との身体機能・能力における相違を明らかにした。本研究結果から、脳卒中患者が早期退院するためには、6分間を自立して歩行可能な身体機能・能力が必要であることが明らかとなった。脳卒中患者は、重症度によって身体機能・能力が異なることから一概には言い難いが、回復期リハ病棟に入院中で歩行可能な脳卒中患者に対しては、歩行耐容能に着目した理学療法が必要であると示唆された。また、一方で筋力やバランスなどを改善させるためには、入院期間が必要であることから、患者の問題点に特化した介入が必要であることが示唆された。

【理学療法研究としての意義】本研究により早期退院が可能な脳卒中患者における身体機能・能力の重要性が明らかになったと考える。しかし、本研究では、対象者が少ないことに加えて脳卒中患者が早期退院に必要な因子としては、身体的因子だけではなく、社会的因子も関連性があることから、他の因子も含めた多角的な研究が必要であることが考えられた。